

# 遼代の仏教とその影響

## 竺沙雅章

只今、過分の紹介を頂きました竺沙でございます。私は、今、最初に紹介して頂きましたように、曹洞宗のお寺に生まれました。その曹洞宗の宗門大学である本学で講演させて頂くことを、非常に光栄に存じております。

今日の私の話は、今も紹介にありましたように、最近問題にしております遼・金・元あたりの仏教の問題であります。仏教と申しましても、私は東洋史の専門でありますと、皆さん方のように仏教学の中身に入るような研究はしておりますが、必ず、その周辺をうろうろしているような状態であります。今日のお話も実は仏教文物を使って、仏教の社会史的な、あるいは文化史的な位置付けを行っていくものにすぎません。

レジュメがお手元にございますが、これは縮小されてますので、見にくいかと思います。一応、このプリントに従いながら、お話を申し上げていきたいと思います。

遼代というテーマにいたしましたが、遼代という時代は馴染が少ないかと存じます。そのレジュメに書きましたように、遼は東モンゴリア地域から興りました、契丹族が建てた国で

あります。唐の時代から、かなり勢力を持つておりましたが、諸部族を統一しました耶律阿保機が建国し、やがて南の方に進出しまして、燕雲十六州という、長城の南側の地域の十数州を領有しました。万里の長城といいますのは、皆さんご存じのように、その以南が漢民族の固有の領域であるという境界線を示しております。だからその長城の南側を北方民族が支配したというので、意味があるわけでございます。

その燕雲十六州という地域、燕というのは燕京、つまり、今の北京のことであります。それから雲というのは雲州、雲崗の石窟のあります大同がその中に入ります。今の省で言いますと、河北省と山西省の北部になります。この地域というのは、唐の時代から仏教が非常に盛んなところであります。いろいろな仏教文物が残っているところであります。そういうところを支配致しましたので、遼の時代になりますても、仏教は非常に盛んがありました。

ところが、南の方は宋でしたが、宋の方には遼の情報がほとんど入ってきておりません。そのため、仏教史の

書物であります『仏祖統紀』とか、あるいは『仏祖歴代通載』といったものには、ほとんど遼の記事は出てまいりません。そういうことで遼の文化、あるいは仏教というものは、ほとんど知られなかつたわけであります。戦前に野上俊静氏の『遼金の仏教』という書物がござりますけれども、その研究は、僅かな資料を集めて、苦労してこの時代の仏教を考察しておられます。そういうふうに、情報の非常に少ないところでありまして、日本とは全然国交もなかつた国であります。

ところが、一〇九一年に日本僧の明範・鄭元らが遼に入つたという記事が、これは日本側にも、それから遼の正史であります『遼史』にも載せられております。これについては、常盤大定氏の論文がございます。どうやらこの人々は遼に入つて武器を売り込もうとしたらしいんですね。それで、向こうからいろいろな物を持つて帰つて来ました。ところが不法に出国したというので、大宰府に捕まりまして、取り調べを受けました。日本の『小右記』などの歴史書の中に、遼へ入つたということが書かれておりますので、その時期、遼という国があつたということは、都の人々は知つていたようであります。遼は日本とそのような繋がりが僅かにみられるという国であります。

ところが近年になりまして、この遼に関するいろいろな仏教文物が続々と出てまいりました。私はこの遼の文化に関心

を持ちまして、それを調べることによつて、遼のことを少し勉強してきたわけであります。どういうものが発見されたかというのを、簡単にレジュメの次のところに述べております。

まず、「房山石経の発掘と整理」というところであります。房山というのは、北京の西南郊にあります。蘆溝橋を通つてずつと西南に行くわけですが、房山の石経といいますのは、今から千何百年も前に静琬という坊さんがおりまして、末法の世になつて廢仏が行われ、この世の中から仏典が無くなつてしまふと、お経が無くなつて仏教が滅んでしまう。そうなつたら大変なので、石にお経を刻んで、それを穴の中に封蔵しておく。それで、そういう時期になつたらそれを取り出して世間に流布する、拓本をとつて流布するという馬鹿でかい発願を致しました。それは、もちろん静琬だけでは成就できませんで、その後代々の人々がそれを受け継いでまいりました。千年近く、石にお経を刻むという事業が行われました。

それが房山の石経で、一応完成しましたのは、完成といふか四大部経という重要な經典が出来上がりましたのは遼の時代であります。そして遼の後半から、その次の金の時代にかけて、小型の石経が多く造られ、地下室に置かれました。房山石経の研究といいますのは、昭和十年に塚本善隆先生達によって行われたのですが、その時には知られなくて、戦後に

なつて、地下室に多数の石経が置いてあることが分かり、その発掘が行われました。その遼と金の時代の石経拓本の写真集が、『房山石経・遼金刻経』というものであります。これによつて、房山石経の遼金時代のものがはつきりしたわけあります。これが一つです。

それから二番目は、山西応県木塔発見の仏教文物です。これにつきましては、二枚目のプリントをご覧下さい。これは一九七四年に応県の木塔、そこに写真を出しましたが、その第四層の仏像、左の方にあります仏像の中に入つていたのが

発見されました。私もここには一九八六年に行つて、中へも入らせてもらいました。ただ、四層に登り、この仏像を見たかつたのですが、三層までしか登れないというので見ることはできませんでした。この仏像の中からたくさんのが出てまいりました。この木塔は、中国で一番古い木造の塔であり、遼の末期、一〇五八年に創建されたものであります。そこから、仏典が中心なのですが、一六九件のものが出てまいりました。

その中で、図版の右上にありますもの、これなんかは木版のお経であります。しかもこのお経には千字文の番号がついております。千字文番号がついておりますのは、下の方の九番としております『中阿含經』、それから巻物になつております『華嚴經』、そういうようなものには千字文番号が入つてい

ます。千字文番号が入つておりますもの、これは大藏經の離れであります。遼代に大藏經の出版があつたということは、もうずっと前から分かっていました。大正元年の論文で、妻木直良という方の「契丹大藏經の雕造の事実を論ず」というのがあります。これは、文献によつてそういうことを確かめたものであります。ところが記録にはあるけれども、実物はこれまで見られなかつたので、幻の大藏經と言われていたのです。それがこの応県の木塔から出てきたというので、学界の注目を集めたものであります。

この図版には、それ以外のものも少し出しました。下の五番のところ、下の真中に、『蒙求』というのがあります。これは初学用の教科書であります。これどうやら、子供がこういう教科書に落書きをしたものであります。これも木版であります。日本でも『蒙求』というのはよく用いられました。木版で一番古いものが、こうやって出てまいりました。それから四番、これは神農という聖人が薬を取りにいったその図であるという、こんな絵も残つております。

この応県木塔の文物が発見されたということは、中国の方で、しかも珍しいことに、すぐに報告書が作られました。ここには書きませんでしたが、『応県木塔遼代秘蔵』（一九九一年）という大きな報告書が出ておりまして、そこに百六十点の図版が全部収録されまして、非常に利用し易くなりました。

三番目でありますが、これは日本にはまだあまり紹介されておりません。中国の友人から情報を得まして、論文にも紹介致しましたが、今度は河北省豊潤県天宮寺の塔の中からいろいろな經典が出てまいりました。それが全部木版なんですね。しかも、装丁も巻物の他に、蝴蝶装という古い帳面式の、我々冊子本と申しますが、そういうものが出でまいりました。その中には、二番の応県の木塔から出でたものと同じ種類のものもあります。従つて、この時代、木版の仏典というものが、非常にあちこちに普及していたことが知られます。

遼という国は、北方民族が建てた国なので、文化が遅れているような感じを持ちますけれども、この燕雲十六州の地域の文化というのは、これは唐代の一番すぐれた文化を継承しております。実は十一世紀の木版の実物というのは、宋の方にあまり残っておりません。従つて、これは最も早い木版資料であるということになるわけです。

それから、四番目は金蔵です。これははずつと前に、一九三三年、山西の趙城県広勝寺で発見されました。金の時代に大蔵經があつたということは、それまで知られていなかつたので、これは実物の方が先に出てきたわけですね。それで日本の学界でも非常に注目されまして、いろいろな紹介論文が出ております。この趙城県の広勝寺というのも、そこには飛虹塔という立派な塔がございます。その中が経蔵になつていまして、そこから発見されたわけであります。この広勝寺というところにも、私は一九八六年に行つてまいりました。非常にすばらしい環境のお寺でございます。ここはご存じのように、日中戦争の激戦区でありました。日本軍が、発見された金蔵を持って帰りそうだという噂があつたらしく、そこで中

応県の木塔のものが出てまいります前に、今さつき紹介頂き

国の軍隊、精銳の八路軍であります。その一部隊がそれを搬出致しまして、夜中にこつそりとそれを持ち出しまして、太行山脈中の鉱山の坑道に避難させました。それが一九四二年のことであります。ちょうどその年の秋になつて、日本からこの金蔵を調査しようというんで、道端良秀とか、小笠原宣秀とか、中国仏教史の専門家の方々がここへ行かれたんですね。それで、住職と掛け合つたところが全然話が合わない。無いといふ。無いはずはない、ここから発見されたんだからといつて、押し問答したけれども、結局、見ることが出来なかつたという旅行談が、『支那仏教史学』という雑誌に載つております。実は住職が嘘を言つていたわけじやなくて、もうその時には、八路軍が持ち出して、そこには無かつたわけであります。

そういうようなことがございまして、解放後になつて、隠されていた金蔵は北京図書館に移りました。移されまして、そこで整理が行われました。そして最近になつて、『中華大藏經漢文部分』という百六冊のものが出来ました。その底本になつたのがこの金蔵であります。我々見ることができなかつた金蔵が、『中華大藏經』によつて見られるようになりました。新しい資料がこれで増えたわけであります。

ところで、一九三三年に発見された後、海外にかなり流出

致しました。特に日本に、どうやら大量に売りに来たようでありまして、ある人が調査してくれましたところによると、現在日本に四十巻ぐらいこの金蔵の離れ本が残つております。また後でお話しますけれども、遼の時代に著わされた書物、それが金蔵の中に入つておりました。そのことについては、既に塚本善隆先生が紹介されておられます。最近発見されたものに、それと同じものが出てくるというような状況であります。いろいろな遼の仏教文物が発見されてきました。それによつて、どういうことが明らかになつたのかということを、これからお話したいと思うわけであります。

まず第一は、大藏經史における遼藏、これまで契丹大藏經と私は言つてまいりましたが、この遼という国は國号を遼と言つたり、契丹と言つたりしております。だからどちらで言つてもいいわけですが、中国では遼藏という呼び方にしておりますので、私もそれに従います。今さつき申しましたように、これまで実物が無くて幻の大藏經であつたものが、この木塔から出来ましたことによつて、遼藏の姿というものが分かるようになりました。

私はこれまで宋元版の大藏經のことを少し勉強しておりまして、宋元時代には十種類以上の大藏經が出版されておるわけですが、それを三つに分類致しました。第一類、第二類、第三類とあります。その第二類に属するものがこの遼藏に

なるわけなのであります。その特徴といいますのは、これは唐の時代長安で行われていた大蔵經、それは写本の大蔵經ですが、その系統を引いているものがこの遼藏であるというふうに私は見ております。この遼藏というのは、日本にはもちろん入つて来ませんでした。この遼と宋との間は敵対関係にありましたために、宋で造られました第一類蔵經と言つて、開宝蔵というものです、それは遼の方に入つて来ませんでした。そこで、遼の方では独自に大蔵經を造つたわけなんです。ですから別系統の大蔵經になつておるわけなんですね。

高麗の方には開宝蔵は伝わつております。伝わりまして、それを復刻しました。それを高麗藏といい、略して麗本ともいいます。ところがその麗本、麗本の初雕本と申しますが、それは、モンゴルが攻め入つた時に版木が焼けて無くなりました。そこで、すぐに再版を行いました。現在、それは海印寺というお寺に版木が残つておりますが、それを再雕本と申します。再雕本を造る時に、守其という人が中心になつて、他のテキスト、宋版とか、契丹版なんかを使って校正を行つております。その校正の文章を集めたものが『高麗国新彫大蔵校正別録』というものであり、これは今も残つております。それに丹本が挙げられています。この丹本というのが契丹大蔵經、遼藏に当たるわけなんです。他の大蔵經に比べて、遼

の大蔵經が最良であるという評価を彼らが行つておるわけなんです。それは当然考えられることでありまして、この遼藏というのは唐代の長安、中央で行われていた写経の系統を引いていますので、最良であるということにならうかと思います。

この大蔵經は、十巻近く発見されましたけれども、他のものは皆失われてしましました。ただそこに書きましたように、房山石經の遼金石經という遼金代に彫られた、これは小型のものでありますが、その小型の石經というものは遼藏を版下に用いたものであると考えることができます。だから、遼藏そのものはほとんど失くなつてしまつたけれども、その姿はこの遼金時代の房山石經によつて窺うことができます。そういうことによつて、現在まである意味では伝わつてていると言えるかと思います。

今度は三番の問題になります。遼の時代に、どういう仏教が行われていたのかということになりますが、特に遼代の慈恩宗、これは日本では法相宗と言つておりますが、中国では慈恩寺に因んで慈恩宗といふうに呼んでおりますが、その慈恩宗というのは唐の時代に玄奘が始まつて、窺基、それから慧沼、智周ぐらいまでしか実ははつきりしていません。いろんな宗派図が仏教史の概説書なんかに載つておりますが、そういうものだと大体智周で終わりになつています。と

もかく唐代で、この宗派は衰えたということになつておるんでは、河北の地方では脈々とその系統が続いておりました。

特に遼の時代には、詮明という僧がおりました。彼は大学者であつたんですけども、高僧伝類には全然名前が出てまいりません。ところが、彼の著した著作というものが、まず金蔵から発見されました。そして応県の木塔からも発見されました。そこにリストを出しましたが、『上生經疏会古通今新抄』、これは金蔵から、それから『上生經疏科文』、これは木塔から出たもので、統和八年という年号があつて、その点非常に重要であります。それから『法華經玄贊科文』、これは敦煌写本、図版の二枚目をご覧頂きたいと思います。その左上方でございます。敦煌写本P、Pというものはペリオ本のこ

とで、今パリの図書館に入っています。二一五九V、Vと

いうのは紙背、裏側に、初めのところだけですが、妙法蓮華經玄贊科文卷第二、その次に燕臺、燕臺というのは燕京のこと、憫忠寺、憫忠寺は今北京の南の方にあります法源寺とい

うお寺で、この寺は北京では一番古い、唐の初めに建てられたお寺です。憫忠というのは、高麗征伐の時に戦死した兵士達を弔うということで、忠を憫れむというのはそういう意味で、憫忠寺という名前になつたなんありますが、唐の初めに出来た寺、それが現在では法源寺と申しております。そこの

沙門の詮明科定というふうに出ております。これがその敦煌写本です。

また一枚目に戻つて頂いて、その他に『法華經玄贊』、これは窺基の著作であります。その会古通今新抄というのが木塔から出てまいりました。会古通今新抄、こういう注釈書の標題というのは時代によつていろいろ流行がござりますが、これは中々氣のきいたもので、古今を会通するというですね、古今の説を全部合わせた注釈という意味であり、どうやらこの会古通今という名称は、詮明自身が発案したようになります。そして後の時代の人も使いまして、『孟蘭盆經会古通今新抄』というのが南宋の著作に出てまいります。

これはその次の成尋『參天台五台山記』の記事、熙寧六年二月二十八日条に、

地北（北地）多く慈恩宗を学ぶ。予、『玄贊』を学ぶ由、告げ示さる。小僧『摂釈』『鏡水抄』有りや無しやを問うに、無き由答えられ、給するに契丹僧作れる『詮明抄』と、憫忠寺、憫忠寺は今北京の南の方にあります法源寺といを以てせらる。『玄贊』を釈せる書なりといふ。

ここで『摂釈』というのは、上の系図の最後のところに挙げました智周という唐代の僧、その『法華經玄贊摂釈』という、これは現在残つてある書物であります。その次の『鏡水抄』というのは『法華經玄贊要集』というもので、鏡水寺沙門栖復という人の三十五巻のもので、これも残つております。

す。両書とも唐末に日本に伝わって来ております。だから、成尋は日本で法相宗を学んでいて、こういう書物のことを、唐代の著作のことを知っていたので、そういうものが有るかどうかと聞いたところ、それは無いという話で、その代わりに契丹僧が作った『詮明抄』というものを貰つたということあります。それは、『玄贊』を釈せる書なりという、とありますので、今度木塔から出てきました『法華經玄贊会古通今新抄』それのことです。

成尋という人は、弟子達に、これまで収集した資料なんかを持たせて日本に帰らせ、本人は中国で亡くなりました。恐らくここで与えられた『玄贊』の『詮明抄』というもの、『会古通今新抄』というのも、この時に日本に持ち帰った可能性があります。それは、日本に行われていたんじゃないかと思いますが、その次の貞慶という人の『法華開示抄』という、重要な注釈書があります。その中に『会古通今新抄』をたくさん引用しているんです。はつきりと『会古通今新抄』に言うというふうに書いてあります。恐らく、その標題の下に著者名があつたんだろうと思いますが、彼が燕京の憫忠寺の僧であるということまで書かれてるわけであります。従つて、この時代には、詮明という人が日本でも知られていたということです。ところが、後になると全然それが忘れられてしまつたようあります。

こういうふうに見てまいりますと、この詮明という人は遼の僧でありますけれども、中国、つまり北宋でも知られていました。それから敦煌にも写本が残つてゐる。この敦煌の写本というのは、宋を通つて渡つたんではなくて、遼から直接敦煌に伝わつたものであります。それから日本にもこうやって来ています。だからこの当時、十一世紀の頃、この詮明という学僧は、今の言葉で言えば、国際的な学僧であつたということが言えると思います。それだけに遼の仏教学がこの時代に東アジアに広く伝わつていたことが知られます。

その遼の慈恩宗学といいますか、慈恩学といいうものは、直接ではございませんけれども北宋から金の時代に影響を及ぼしておりますし、そしてそれが元の時代まで伝わつております。元の時代に、雲峰という人の『唯識開蒙問答』というようなものが、これは入門書ですが、こういうものが現在も残つております。その後、法相学が中国の居士の間に非常に人気がありました。明末の頃の居士達は、この法相学を勉強しましたし、清末になりましてからも、法相学は居士達の間に研究されておりました。その資料となつたものに、この『開蒙問答』という書物が一つの手引になつておるわけなんです。ですからこの詮明なり、あるいは北宋から金の時代、そして元の時代と伝わつてきた法相学というものが、後世に

まで影響を及ぼしているということが分かるわけあります。

そこに守干という人を書きましたが、この人は北宋末から金の初めにかけていた人でありまして、北宋の都の開封におきました。ところが北宋の末期になつて、自分の郷里の山東の方に帰りました。この人も非常にたくさん著書を著しておりまして、それは日本に伝わっています。その学僧の著

書の中に、遼の仏教学のことが、僅かですが書かれています。どうやら関連があつたらしいということが分かるわけなんです。

そういうふうに細々とありますけれども、慈恩宗というものが河北の間に伝わっていたということが、実物によつて証明されるわけであります。この問題は、私、だいぶ前に書いたことなんですが、近年になりまして、もう一つの学派、華嚴宗の系譜について、最近それをたぐつております。

华嚴宗の系譜といいますのは、杜順—智儼—法藏—澄觀というものが特に重要であります。賢首大師法藏ですので、华嚴宗は別名、賢首宗ともいいます。これは慈恩宗と違つて、宋代以後にもずっと系譜を辿ることができますが、特に遼代では华嚴宗が盛んでありました。このことは、もう既に東大の木村清孝先生とか、あるいは鎌田茂雄先生なんかも触れておられます。

この時代の皇帝に道宗という人がおりますが、彼の著作に『發菩提心戒本』、あるいは『隨品贊』といった書物が『義天錄』に、義天はまた後で申し上げると思いますが、高麗のお坊さんですが、その目録に載せられております。それから鮮演という人がおりまして、その人に『華嚴經玄談決擇記』というものがありまして、これについてはまた後で申し上げます。

こういうふうに、遼の時代に华嚴宗が盛んであつたということは、これまでから言われていましたけれども、実際の物はなかつた。それが最近になつて、木塔から华嚴関係の書物が発見されました。その一つがそこにある『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』で、これは四十巻にもなる、澄觀の著した大部な注釈書であります。

ところで、その木塔から木版印刷のものが発見されました。二枚目の方の図版を見て頂きたいと思います。上の方が木塔から出たものであります。『大方廣佛花嚴經』、この時代の華嚴經の華という字は、この簡単なほうの花に書くことが多いでした。実はこの『華嚴經演義鈔』といいますものは、現在東大寺に入つております。その東大寺に入りましたものは、最初のところに、レジュメに出しましたように、義天という坊さん、この坊さんは文宗という皇帝の第四子ですが、仏教学を修めて宋に留学しました。そして华嚴を学びま

した。帰国してから、この人は仏教関係の書物を収集することに情熱を燃やしまして、宋から持つて帰つたもの、それから遼やら日本に手紙を出しまして、高麗にない注釈書を集め、続蔵を作りました。それは『高麗続蔵』というものであります。それが、その『高麗続蔵』の中にこの『演義鈔』が入つております。

この『演義鈔』は、日本の保安元年（一一〇〇年）に、東大寺東南院の覚樹が高麗から輸入致しました。それが現在、東大寺図書館に残つております。『演義鈔』全部が完本であるのは、世界でこの東大寺だけなんであります。今度出てきました木塔本、これは遼のもので、それとこの東大寺本とを比較して見ますと、図版の上と下とをご覧頂きましたら、そつくりなんです。文字の形まで一緒であります。ただ違うところは、柱のところですね。木塔本は、一行目と二行目の間に柱の小さい文字がありますが、下の方は、木塔本よりも一つ前のところ、前の版本の終わりに入つております。その柱の位置が違うぐらいであります。だから、この東大寺本は木塔本を復刻したということが言えます。

少し違うところは、木塔本で七行目、「薩衆中威光」の光という字が、最後の一画が無いということであります。下の方を見ますと、東大寺本はちゃんと威光の光の字の最後のハネが残つております。これはなぜか。中国では自分の王朝の皇

帝の名前は書いてはいけない。だからその字があつたら、別の字に替えるという方法があります。例えば、唐の太宗の李世民の世民という字は、唐の時代では書いてはいけなかつたのです。そこで一つの方法は、世界の世という字を代といふ字に書き替え、それで代用するわけなんです。それから民という字は、人という字に書き替えるというように別の字に改める方法と、こういうふうに一番最後の筆画を書かない、これを欠画というふうに申します。そういう両方の方法があつたわけですが、遼の時代は、この光という字、これは耶律德光という太宗の名前の一字なんですが、それはこういうふうに欠画にしたわけなんです。それが高麗に伝わつたら、高麗で版本にする時にはもうそれは関係無いことでありますから、そこで光の字はちゃんと今の字になつておるわけです。そういう違いがあるぐらいで両本はほとんど一緒であります。

私もこの『演義鈔』を東大寺図書館で見せて頂きました。重要文化財になつておるものですが、これは非常に大きな巻物として、一巻十数メートルになります。開けるのはいいんですが、開けたら今度は仕舞うのが大変で、とても綺麗に巻けないんで困りました。係の人にお任せしましたけれども。ともかく木塔で発見されました四巻、それだけは全部初めから終わりまで点検させてもらいました。そうすると大体一緒

なんですが、ところどころ高麗版と違うところもございました。しかし復刻であることだけは、つまり遼のものの復刻が続蔵本であることは確かめられました。そしてそれが日本にすぐに伝わりました。それ以後、華嚴学の『演義鈔』研究では、このテキストがずっと使われました。ただ大正蔵経はこの東大寺本は使わず、明版の悪い方を使つております。本来なら大正蔵経は、この東大寺本を使うべきであったと思います。こういうふうに、この『演義鈔』の場合は、原本は遼にあつた、つまり大袈裟な言い方をしましたら、日本の華嚴学は、そのルーツを辿ると遼に辿り着くということが言えるわけであります。

それから次に『華嚴經玄談決擇記』というものでありますが、これは高山寺に残つておりまして、前からよく知られております。その著者は鮮演という人であります。その人の伝記は、これまで分からなかつたんですが、最近になりまして、一九八六年に「鮮演大師墓碑」というものが発見されまして、この人の生卒、生まれた年は分からないんですが、大体一〇四〇年代に生まれまして、一一八年に七十歳余りで亡くなつたということが、今度はつきり分かりました。彼のこの本も高麗に伝わり、義天が続蔵に入れました。それが宋に渡りまして、図版の最後の方の左下を見て下さい。これは『大方廣佛華嚴經談玄決釋』となっています。これによつてこれま

では皆、談玄決釋と言つていたんですが、今度墓碑が出てまいりまして、はつきりとこれは玄談決擇が正しいということが分かりました。意味の方からいつても玄談でないとおかしい。どこかの段階で間違えたんですね。書写している間に、標題がひっくり返つたようであります。

これは、部分部分をコピーしておりますので分かりにくいかと思いますが、奥書きが入つております。真中辺のところに、

高麗國大興王寺寿昌二年歲次丙子奉宣雕造  
とあります。これが義天の続蔵の刊記であります。そしてその次に、

大宋國崇吳古寺宣和五年癸卯歲釀安仁傳寫  
とござります。この宣和五年というのが、レジュメに書いてます一一二五年です。これは北宋末です。そして、  
淳熙歲次己酉吳門釀祖燈科點重看時年七十二歲也  
とどうふうに書いてます。これはその次の奥書きで、従つて一一八九年です。この祖燈という人は、その次のところにも出てまいります。「寫本記云」という一番最後のところに、「淳熙歲次云々」とあり、

祖燈眼疲也莫罪々々  
と書いてあります。一生懸命書写してて、眼がもうくたびれて、七十二歳ですから当然かもしれません、それで罪する莫

れ、許してくれというふうに書いてあり、中々おもしろい奥書きであります。また初めのほうの

弘安八年九月十九日於高山寺書寫了

というふうにあります。最後は南宋の時にこれが日本に伝えられまして、そして高山寺で一二八五年に書写したということです。

ここで私が注目したいのは、この『玄談』の方は、いつ頃か分かりませんが、一〇七〇～一〇八〇年の頃に作られ、そ

れが高麗統蔵に入つたのが一〇九六年、そしてずっと宋を伝わつて、日本で書写されたのは、それから二百年経つた一二八五年という、長い時間をかけていることあります。上の方の『演義鈔』の場合は、すぐに高麗から日本に伝わつています。そういう伝わり方の年代の差というものが、ここで見られます。

それから三番目に、遼、道宗金泥親書『菩薩三聚戒本』の伝承、というものをそこに書きました。実は、これはつい最

の時代の碑文に「善選伝戒碑」というのがございまして、この碑は一三六四年に建てられましたが、その中に道宗の作った金泥親書の『菩薩三聚戒本』というものが、悟纏—円怡、以下ずっと伝わつていつたと書いてあります。つまり遼末から、遼の道宗の時から金に伝わり、金から元に伝わつてゐる。

そういう伝承がずっと書いてあるわけなんです。これは、場所はどこかというと燕京、今の北京、元の時代は大都と言っているところですが、そこでこれが伝えられています。戒本でありますから、これは戒律の書物であります。戒壇を主催した坊さんが、次々に一つの証拠、証明書のような形でこれを伝えていったというのであります。これこそ遼の仏教が、遼から金、金から元へと伝承されていつたことを如実に示している資料であります。

こういうふうに、華嚴宗というのは遼の時代に盛んでありました。その華嚴宗というのは、唐代の澄觀の教学、それが遼に伝わり、「演義鈔」は、その後遼から高麗、高麗から北宋に伝わりました。義天のお師匠さんに淨源という僧がおりましたが、その人が中国の華嚴学を再興致しました。その後に伝わって、それが南宋、それから元へという伝承を辿つてあります。詳しいことはもう論文に書きましたので、ご覧頂きました。

その他に遼の時代に盛んであつたものは、密教と律宗であります。木塔からも密教関係の書物が出てきております。密教が盛んであつたということは、これもこれまでから触れられております。例えば『釈摩訶衍論贊玄疏』なんかというようなのは、これは日本に伝わって現存しておるものであります。

ますから、昔からよく知られています。こういう書物があるので、遼代は密教が中心であつたというような説まで出ています。それは、たまたまそれが日本に伝わっているからであります。そして、密教だけが盛んであつたわけではない。むしろ密教にしましても、戒律なんかにしましても、華嚴の影響というのが非常に強い。華嚴と習合したような形の教学であります。だから五番目のところは、もうそれぐらいにいたしまして、問題となりますのは禅宗のことであります。

私は大分前に中国で小さな研究会で発表した時に、ある人から質問を受けました。遼の時代の禅宗はどうなつていたんだと。確かに非常に問題であります。つまり、燕雲十六州ができる前の唐末五代の頃は、河北の方では禅宗が非常に栄えておりました。一番有名な人は臨濟義玄ですね、『臨濟録』の。ああいう人々がいました。つまり北の方には禅宗、特に臨濟宗が盛んであつた。ところが、遼の時代になつたらそれがばつたり無くなつてゐるような印象なんですね。特に、ここに引用致しましたが、高麗義天の「跋飛山別伝議」という、これは『釈門正統』に引用されています。実は『釈門正統』とか『仏祖統紀』とかいうものに、遼の仏教関係の記事と申しますなら、実はこれしか載つてないんです。これもしかも義天が実際に見たものではなくて、そういうふうに聞いたといふことなんです。

近ごろ、大遼皇帝、有司に詔して、義學沙門詮曉等をして經錄を再定せしめ、世に所謂『六祖壇經』『宝林伝』等、皆焚かれて、その偽妄を除く。

というふうに書かれている。そこで詮曉という人ですが、これは前に申しました慈恩宗の詮曉が、明の字もこれは皇帝の名前なので、それを曉に替えたもので、つまり詮曉というのもとの名前は詮曉であるというふうに言われております。ただ、「近ごろ」というふうに書いています。義天の頃には、この詮曉はもうとつくにいない。ですから、これはどうも伝聞の誤りか、詮曉というのは詮曉とは別人ではないかというふうに考えられます。この文章では『六祖壇經』とか『宝林伝』、これは皆禅宗の書物で、そういうものは全部焚かれてしまつて、禅宗が弾圧された。だから遼の時代は禅宗が行われなかつたんだというふうに言われております。

ところが『釈摩訶衍論通玄鈔』、これは残つております。密教の現存の書物であります。それを見ておりましたら、『景德傳燈錄』が二か所引用されておりました。従つて、禅宗関係の書物が全部焚かれたというんじゃないなくて、『景德傳燈錄』なんかはちゃんと行われていたということの証拠になります。

そもそも義天のこの文章というのは、自分の国のことではなくて、隣の国のこと書いておるわけでありまして、これ

に真実性があるかどうかということは疑いがあります。禅宗について、五代から遼へというつながりのある禅僧の伝記があります。僅か一人ですけれどもあります。もう少し詳しく調べていけば、遼の時代の禅宗がつかめるのではなかろうかと思います。禅宗は唐末には河北の方で盛んでありました。南の方はもちろんありますけど。ところが宋の時代になると、南の系統しか分かりません。ようやく金の後半期になつて北方にも禅宗が出てきます。特に、北の方は曹洞宗が行われているのですけれども。そういうものが行われる地盤として、遼とのつながりが考えられないかどうかということを、これはこれから課題になると思って、私も少し注目しておるわけなんですけれども、今のところまだはつきりと申し上げるところまではいつております。

そういうふうに見てまいりましたら、遼という時代、これは日本にとってあまり縁のない、特に概説書なんかでも、遼の仏教というのはほとんど言及されることが少ないんですね。遼代仏教が果たした役割は大きく、特に華嚴宗、慈恩宗といふものは、国境を越えた文化の交流が見られたことが分かります。実は遼と宋の間には、最初に申しましたように、澶淵の盟という平和条約が一〇〇四年に結ばれました。ところが、

書物の交易は非常に厳しく取り締まられました。つまり宋の方では、政治関係の書物、あるいは地理関係の書物は、敵を利することになるというので、輸出することを厳禁しておりました。また遼の方も、自分のところの書物を宋に渡すこと、商売することは厳禁しております。そのことが発覚したら死刑になるということは厳しく取締りが行われています。死刑になるというような非常に厳しい取締りが行われていて、つまり文化協定は結ばれておりませんでした。そういう中にあって、そういう政治上の制約の中でも、文化というものは、国境というものを越えて流通して、伝わっていくということが、この仏教文化の中で見ることができます。日本との関係について、そこに三種類のルートを書きました。実は逆にした方が良かつたんですが、遼から日本に直接伝わったケース。これは実物はないんですけども、あるいは日本から行つた明範とか鄭元等が直接日本に持つて帰つてきたものがあつた可能性はあります。これはしかし押さえられません。それに対して遼から高麗、高麗から日本へというケース。これは、今さつきの『演義鈔』のケースがそれですが、こういうふうに見てまいりましたら、東アジアにおいて遼代仏教が果たした役割は大きく、特に華嚴宗、慈恩宗といふものは、国境を越えた文化の交流が見られたことが分かります。非常に短期間に流傳しています。ところが、遼から高麗、宋、そして日本というケース、これは『玄談決擇記』、鮮演の

著作の場合がそうであります。その場合には、書物が出来てから二百年以上かかるに日本に伝わる、というような非常に長い期間を経て渡つてくる場合もある。しかしながら、ともかくそういう交流が細々と続いていたということが言えるわけであります。

それともう一つ、私の年来の主張でありますけれども、宋元文化を捉える場合に、その北の流れというものがあるということです。南の流れと北の流れと、二つの大きな流れがあります。南の流れというのは、ずっとこれまでから言われていることであります。北の流れというのは遼から金、金から元、あるいはもう一つ遼から北宋、北宋から金、それから元という、そういう流れがあつたということが、こういう仏教文物の流傳を通じて証明されるということであります。

もう一つ申し上げますと、中国の歴史の中で宋元時代といふによく申します。宋元時代の中のその宋という時代は、概説書なんかでも多くは北宋と南宋だけを取り上げます。実はその中国の北の方、遼の時代は僅か十六州ではありましたけれども、しかし漢族の、漢人の住んでいる中国文化の行われている地域を支配していました。例えば、北京の歴史といふのは、宋の歴史上にはそれは出てこないわけです。北京の歴史は、五代の時から遼、金、そして元というふうになつてゐるわけなんですね。雲崗にしてもそうです。そして金の時

代にはもつと広くて、中国の北半分は金の領土になつております。それも中国のもともとの領土で、唐代には中国文化の行なわれていた地域が、北宋から金へと移つていったわけなんです。

そういう地域を含んでいるのに、宋代というと北宋から南宋だけを捉える。そして遼と金というのは、これは塞外史の領域だというので、中国史の中に入れない。それは非常におかしいんじやないかということなんです。特に仏教の場合、それは遼も金も非常に尊崇しておりましたし、仏教文化が栄えておりました。だから南と同じように北の方にもその仏教文化の流れがあつたわけです。両方合わせて宋代というふうに捉えないといけない、ということを長年申してきておるわけなんです。そういうものを理屈で言うだけではいけないんで、そういうものを実際の物によつて示すということが必要だというので、こういう仏教文物の研究をずっと続けてきておるわけなんです。

これから先も、まだどういうものが現れるか分かりませんが、またこれまでの私の考えていることが補強されていくことを期待しながら、こつこつと調べておるような状態でございます。雑駁なお話でございましたけれども、これで終わらせて頂きたいと思います。

（司会）先生どうもありがとうございました。遼代の仏教に関しまして非常に貴重な、新しいいろいろな文物の発見を通してのお話を伺つたわけですけれども、せつかくの機会ですので先生に何かご質問等ありましたら、また先生からお答え頂きたいと思います。

（吉津宜英教授）先生どうもありがとうございました。仏教学部の吉津と申します。一つ明惠上人の視点からご質問をさせて頂きたいと思います。明惠上人の教学は、よく厳密とかいいまして、厳密という言い方は石井教道先生がされたんでしようが、華嚴と密教が重なつてているというようなことが從来言われまして、その華嚴と密教が重なつたという部分に関して、やはり今日先生がお話になりました遼の仏教の影響が、文献を通してかなり強いのではないか、というふうな指摘がされているところもあるよう思ひますが。その点について、今日ちょっと密教のところは先生少し説明は譲られましたけれども、華嚴は非常に強い教学であるというふうに言わされました、これまた密教も多分日本への影響も結構強いのではないかと拝察いたしますので、華嚴と密教の重なりという面で明惠上人への影響というようなものをどのようにお考えかということと、関連しまして、もう既に指摘されております高山寺、明惠上人のご努力といいますか、大変いろいろな文献を大陸、あるいは半島の方へ求められたという跡が残つ

ておりますが、そのルートに関しましては、最後にまとめられました三つの系統では大体どのような収集で高山寺の方へ文献が、今だんだん公になって、かなり公になってきておりますが、そのルートに関しまして先生のお考えを拝聴できればありがたいのでございます。

（竺沙先生）どうもありがとうございます。明惠のことについては、私は門外漢でございますが、ここに資料として出しましたようなものは、私も関心を持っておりますのは、例えば『通玄鈔』とか密教関係の書物は前から日本に伝わってて、そして続蔵に入つて我々見ることができる。それがどういうふうにして入つて来たんだろう、というのは私自身も非常に関心を持っているんですけど、まだそこを押さえられてないんです。慈恩宗の方につきましても、北宋時代の守千という坊さんの注釈書がかなりありますし、その奥書きは皆、薬師寺なんですね。すると、薬師寺にどうしてそれが入つて來たんだろうというと、それが分からぬ。唐代の慈恩宗のものは、唐末に入つて來たというのは奥書きで分かるわけなんですね。

それで高山寺のものになりますと、これはやっぱり鮮演の『決擇記』の奥書きが象徴しているように思ひます。つまり南宋から日本に入つて來た。そこで宋と遼との関係は、今申しましたように直接交流は無いわけなんです。できないわけな

んで、高麗を通つて、そして高麗から宋に渡る。それに大きな役割を果たしたのは義天でありました。義天が続蔵を造つてそれを宋に送りました。それから、続蔵でなくつても、華嚴宗関係の書物なんかは、そのお師匠さんの淨源のところに送つているわけなんです。それから『決擇記』の奥書きに高麗寺と書かれています。もともと華嚴の淨源のいました惠因院というお寺がありまして、それが惠因寺になるんですが、そこは義天が学んだところで、義天がそこへいろんな華嚴関係の書物を寄贈しました。そこでこの寺は高麗寺という名前で世間で言われるようになりました。そこにはかなり高麗からきた仏典が置かれていたらしくて、日本から行つた坊さんは、高麗寺でこの本を写したというふうなことも書かれています。

ですから高山寺なんかのものというものは、これは南宋の江南地方、杭州を中心とした、そのものが高山寺に入つてきております。版本の華嚴の注釈書類も高山寺に残つております。そういうものも結局南宋から入つてきただろうと思います。だからルートとしては、遼から伝わつてくるのは、直接よりは一番最後の長いルート、それが一番多かったのではないだろうかというふうに私は感じているんですけども。なんとかルートを調べていきたいと思うんですが、中々手がかりが得られないんで、むしろ日本のことをおやりになつてら

れる方からいろいろと教えて頂きたいと思うことがござります。

(吉津教授) いかがでございましょうか。華嚴と密教との重ねるような教学の原初形態が、そのような文献を通して明惠上人に影響を与え、あるいは遊心安樂道といいますか、そういうようなあたりのなにか形態がいろいろ議論がございますけれども、それはちょっとおきまして、華嚴と密教とが重なるような、今日は先生は私達に判り易く分けて説明してくださいましたけれども、特に華嚴と密教が重なるような傾向というようなことが、どうでしょうか、ございましたらちょっと教えて頂きたいんですが。

(竺沙先生) 伝承関係ですから分けたわけですが、元という

せんが。そうした教学的な問題は私、門外漢で分からないんですけれども。

（吉津教授） どうもありがとうございました。

（石井修道教授） 石井でございます。どうもありがとうございました。先生の遼代文化のご意見の中、大変興味深く思っています。ありますことは、今日のご発表の中にもあつたんですが、遼の文化とそれから宋の文化とが、大変対照的な文化を持つていると。特に遼の文化は、今日のお話の中にありましたように、かなり唐代の文化を吸収して花開いたと。それからまた宋の時代も新しい文化の動きがあるので、大変対照的だという話を先生されておりますが、近年の、今日紹介されました新しい文物等も含めて、その点先生どんなお考えかということをちょっとお伺いできればと思います。

（竺沙先生） 非常に難しいと思うんですが、北と南で違いはあると思うけれども、なにか『演義鈔』なんかの伝来を見ておりましたら、非常に交流しているんですね、意外と。だからそれほどの差が無い。むしろ出版文化なんかを見たら、南より北の方が進んでいるという感じがする。これからの問題だらうと思いますが、カラーは違うと思うんですね。それはもちろんそうでしょうし、北と南ではやっぱり文化の違いはあるけど、それが唐代の文化をそのまま受け継いでいるという面はあると思います。それは愛宕松男先生が唐の三彩で、

陶器のことでおっしゃっている。唐の三彩が遼の三彩になつていて。それは唐の文化をそのまま受け継いでるんだと。これがある意味ではこれまでの通説であつたろうと思います。しかし最近のこういう文物が出てくると、そういう見方はこれから変えていかねばならないんじやないかと。変わつていく可能性の方が強いように思います。だからあまり後進性を言うと間違うんじゃないかなと思つておりますけど。しかし唐の文化を非常に強く持つてているのは北の方であつて、それを新しい方向に進ませていったのは南であつたということは言えるかもしません、それは。

（岡部和雄教授） どうも先生ありがとうございました。東洋史の辞典などを見ますと、契丹という言葉はキタイという言葉の複数形で、それを通していわば、あれはモンゴルを通してでしょうか、キタイという言葉が、例えばロシア語とかそういう西欧の言葉に入つて、中国そのものを指すようになつたというふうに解説があるんですが、そういうふうに中国を代表する名前になるほど外国に知られた国が、その後必ずしも文化が中国の伝統文化の中に残つていないといいますか、先生おっしゃった今日のご発表を聞いても、やはり断絶はあるかなという気はしてますが、そういう点はいかがでございましょうか。

（竺沙先生） 仏教の場合は特に象徴的であると思うんです

が、やっぱり最近までそうですけれども、遼といえれば塞外史なんです。塞外史、外国史だという考え方が非常に強い。それは南宋時代は特にそうですね。北宋の時には、一応遼と宋とは対等の関係であつた。そういう対等関係を結んだのは宋代になつてからで、唐代まではそうではなくて、中国が中心であつて、唐王朝が中心であつて、周辺は朝貢国であるという考え方がありました。それが澶淵の盟なんかで北宋と遼とは対等だということになつたわけなんですけど。だから北宋の時代の人々というのは、ちゃんと大遼国というふうに宋の人も言つているわけなんですね。ところが南宋になつてきてからかえつて金との対立なんかがあつて、国粹主義になつていつた。名分論をやかましく言い出して朱子学なんかになつていく。だから余計にそういうものを無視する格好になつたんではないかと思うんですけど。ともかく、北宋の時代に仏教のことでもそれは伝わつていると思うんですけども、記録に残さないというところが、やっぱりなんか遼を無視しようというのが強いんじゃないでしょうかね。それで遼という国は、むしろ中央アジアの方にカラキタイ、西遼、西の遼という国ができたりします。それでそのキタイという言葉、今ロシア語になつておるというので、西の方にかえつて影響が大きいのだろうと思うんですけど。

(司会) よろしいでしようか。大変長時間に及び、先生どう

ありがとうございました。以上をもちまして、本日の講演を終わらせていただきます。

(一九九九年一一月二九日、駒沢大学仏教学会公開講演会の講演録をもとに、先生にご加筆ご改稿頂いたものです。)